

## 後記

この二篇の長詩は昭和二十二年春に書いた詩です。死ぬと思って行つた学徒出陣での海軍からの帰還。もう一度俺にも人生が始まるんだと、そんな感慨が一杯だった春です。昼、部屋にいて、フト目の前が暗くなり、黒い画面に約三十センチ角大の、それこそ黄金色の文字が浮かびました。水、そして次に晶、次は宮。ビククリする気持と、それを書きとめておかねばという気持で、そばにあつた紙に筆記しました。すると、次々と、黄金文字が浮かぶので、すべてを写し終わつたら、読んでみたら「水晶宮」という一篇の詩でした。

それから程なく、同じ部屋で同じ状況で、今度は白銀色の文字が一字ずつ次々と現れ、これも写し取りました。これが「白明宮」でした。どちらも私の思想も思惑も期待も一切入らない、純粹な写し取り文字です。

以来、私の詩は、こんな一文字ずつを見せられるということはないが、脳の裏に意識文字が数文字ずつ印象づけられる、それを素早く筆記するという形で、……つまりこれが私の詩作法です。従つて、私の書く詩には私の思想を越えた、時折、予言的な詩が出てしまいます。『一九九九年のために』とか『アオミサスロキシン』とか『夕暮れの歌夜明けの歌』等とか、完全筆写詩集です。

さて、この水晶宮と白明宮は、前者は地底の世界、後者は空中の世界、どちらも架空の世界のようで、何かいわくがあるようであり、ありげな世界。地底はシャンバラという聖白色同胞団の聖所があるとも聞いています。法華経では末法の世に、大地震裂して菩薩・摩訶薩が地上に出て来ると記